

佳作

『普通じゃない』は素敵な個性」

別府市立北部中学校一年 古川 凜

「支援学級の子って普通じゃないよね」

これは僕が小学校6年生の時に同級生が言っていた言葉だ。僕には小さい時から障害があつて、保育園のころから近くに先生がついていてくれたと母が言っていた。

そもそも同級生が言っていた「普通」って何なんだろう。支援学級の僕が普通ではなくて、同級生たちは普通と言う事は支援学級に行っている人はみんな普通ではないという事になるが、支援学級に行ってもしている勉強はみんなと同じ勉強だったし、国語と算数以外はみんなと一緒に勉強していた。僕よりテストの点数が低い子もいたが、「それ」を普通じゃないとは僕は思わなかった。

人にはそれぞれ得意不得意があると思う。例えば僕は、運動が苦手だ。走る事や鉄棒、長い距離を歩いたりする事もあまり得意じゃない。数学も得意なところと苦手なところがある。国語の文章題は苦手だけれど漢字は得意だ。社会の歴史問題などはだれにも負けたくない大好きだ。みんなそれぞれ得意不得意があり、みんなそれぞれ違うから助け合って生きていくのだと思つている。僕の事を「普通じゃない」と思つていた同級生たちは僕の事を障害があるから何も出来ない奴だ、障害があるからとろいんだと思つていたのだと思う。

でも僕は生きていく中で障害がある、ないは関係ないと思う。ある日、とても勇気づけられる事を知つたのだ。歌手の米津玄師さんは僕と同じ「発達障害」があると公表しているが、たくさんの人を感動させるような歌を生み出す米津さんを僕はすごいと思うし、他の人た

ちもすごいと思うのではないだろうか。また、ぼくが大好きな織田信長や坂本龍馬も発達障害だったのではと言われている。今の時代にも名を残す偉人たちが発達障害だったかとも言われているのだから、障害があるから何も出来ないなんて事は全くないと僕は思っている。得意、不得意というのはその人の個性である。人間は一人一人みんな違うのだから、人の数だけたくさん個性がある。僕は将来映画監督になりたいと思っているが、障害があっても人を感動させたり、日本を動かす力がある人達がいたりして、勇気づけられた。

この夢を最初に人に話した時、「何を言ってるんだ、絶対無理だろ。」そんな反応が返ってきた。悔しいと思った。母が「人を感動させるような仕事をするためには色んな物を見て、経験した方がいいよ。」と言ってくれた。普段の休みはゲームをして過ごす事がほとんどで、知らない事がたくさんあるから、舞台を観たり、博物館に行ったりして感性をみがいたり、歴史の動画を見たりして色んな事を知っていきこうと思っている。同級生が僕の事を「普通じゃない」と言っていたが、「普通」な人なんてどこにもいない、みんな違うのだ。僕は今の自分が大好きだ。自分のやりたい事を自分で考え、その道を目指して頑張っている自分を誇りに思っている。

中学生になって、僕にはたくさんさんの友達が出来た。支援学級に行っている僕を普通か普通じゃないかではなく個性的な存在だと思ってくれている。障害がある人は何も出来ないかわいそう。それは周りの「自分は『普通』だ」と考えている人が思う事だ。それぞれの人が持つ個性という輝きを尊重し合い生きていける社会になれば、もっと障害者が輝ける社会になるんじゃないかと思っている。どんな社会も作っていくのは自分たち。僕は僕の周りのすべての人の個性を尊重して共に生きていけるような楽しい社会を作れる人になりたいと思う。